鉄砲洲神社詩吟　素読論語解説
（平成 27 年 6 月 5 日）

【三七】子曰く、我を知ること莫きかなと。子貢曰く、何為れぞ其れ子を知ること莫きやと。子曰く、天を怨みず、人を尤めず。下学して上達す。我を知る者は其れ天かと。

孔子が、私のことを理解する者はこの世には誰もいない。顔回が亡くなりましたので、悲嘆にくれて自分のことを理解している者は弟子には誰もいない。いわんや世間は私のことを誰も知らない。名前ぐらいは知っていても、自分のことを理解している人はもういないと、絶望をして愚痴をこぼしているところです。

子貢は、「どうして先生を知る者がいないと言うのですか」と。孔子は、「天命だと思って一生懸命やってきたが、報われていないことは致しかたがない。天を怨むことはしないし、誰も咎めることはしない。人間社会の身近なことから一生懸命に勉強してきた。どうにか天が授けている学問が分かってきたように思う。したがって私を知っているものは天しかいないのではないかな」と答えています。

人間社会のことを諦めて、天に自分の一身を委ねるという会話です。

現代にあわせてみれば、先日、矢野弾さんが主宰している雑誌カレントの 50 周年記念がありまして、出席してきました。自民党谷垣幹事長の話を聞いてきました。ゆったりした良い話しぶりだなと思いました。予定していた人が話ができず、急に谷垣幹事長に話を振られたということでした。本人は穏やかな調子で、「私は残念ながら総裁迄でした」と語っています。ここの章の言いかたをすれば天を怨みません、人を咎めません。順番は回ってこないでしょうが、万が一もし回ってきたら、それなりに役目をはたさせて頂きますという内容のことを話しておられました。まだやる氣は無くなっていない、チャンスが回ってきたら私はやるつもりだと暗に言っています。政治家は、死ぬまで踊りを止めないのだなと思いました。

孔子は諦めてしまったけれど、今の政治家は、天は怨まない、人も咎めないと言う割には、政治家そのものは諦めないものだなと感じました。